

金沢

かわら版

5

尾張町しんせ通りで

は残っている。

例えば、インスタントコーヒーと茶道の差に似ている。つきつめれば、どちらも色の付いた粉にお湯をかけて飲むだけのもの。ところがかたや、合理的に飲む茶色の粉。かたや茶道は緑色の粉を飲むだけのものではない。

い。こころを持って作法・道具等で、その過程と配座を大事にして味わうところに、大きな違いがある。
表に現れた形を超えてこの街に飽きることのない魅力を見出し、それを語り伝えることが街に住む者の使命と考える。
(石野 珠一 尾張町若手会)

「あの人(泉鏡花)が因(お)ったということ、わしらの商売とは何のかかわりもなかったよなやね」

町の古者にとって、今でこそはやりものように騒がれているけれど、日々の商いに忙しく、両売に縁のない人のことを気にかける暇がなかったのが実態だ。そりや、時には主計町へ旦那(だんな)さんとして通ることがあったも。

泉鏡花と商人

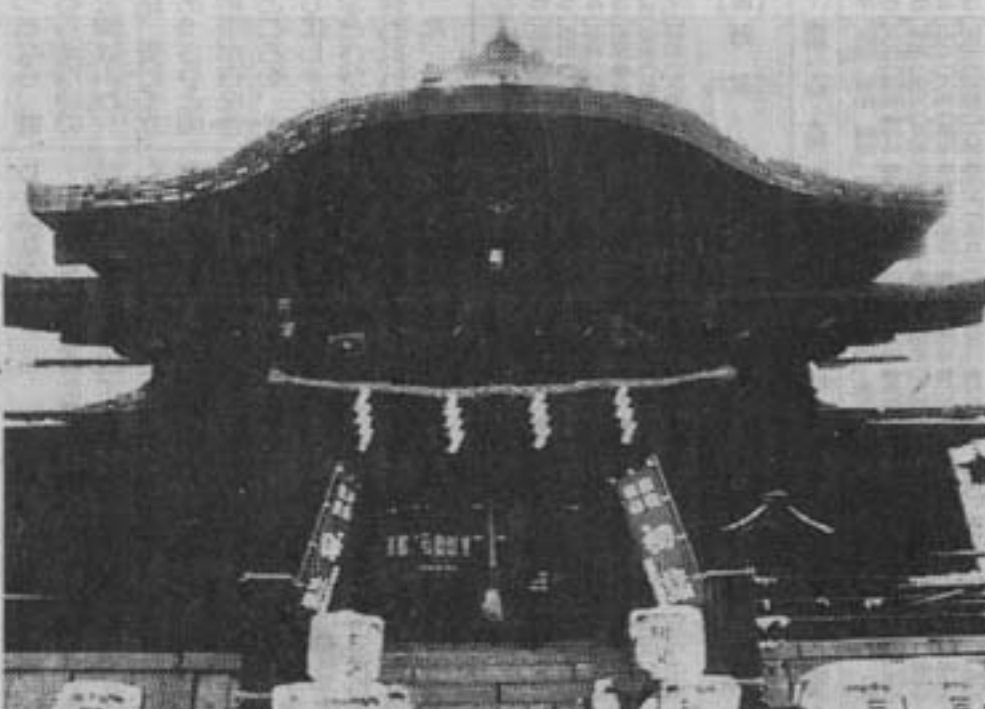
一方、鏡花も「加賀っぼは何だか好かない。……けれども、加賀の自然、金沢の天地は、流石に今も尚(な)は幼い時分の記憶を動かして来る」(『自然と民謡』より)

鏡花の生家の前にあった久保市乙剣宮神社(通称久保市神社)は、「山崎田市(くぼいち)紺」(という金沢最古の市場の由来にかかわりを持つ)とされる地だ。その鏡花が記す。

「あそびなかまの暮ごとに集ひしは、筋むかひなる懸社乙剣の旨の境内なる御影石の鳥居なかなり。いと広くて地をば奇麗

接点こそないが ともに町へ愛着

老舗(しにせ)の街のたたずまいは、その成り立つ過程で、いろいろなもの絶えることのない蓄積によって密度を増し、価値を持って来る。知らず知らず、高い文化が貴重な意味を発酵させる。近代的な町づくりと一線を画すものが、ここに



久保市神社境内

鏡花の『照葉狂言』には、幼少時代に遊んだ境内への憧憬(しょうけい)が鮮やかに記されている。